

2列王記8-10章 「北イスラエルの宗教改革」

1A 神の裁きの始まり 8

1B 残された者への恵み 1-6

2B ハザエルの台頭 7-15

3B アハブ家の浸透 16-29

2A 油注がれたイスラエル王 9

1B 即位の危急性 1-13

2B 悪の交わりの滅び 14-28

3B 背教の女の滅び 29-37

3A 不完全な改革 10

1B アハブ家の惨殺 1-14

2B バアルの宮破壊 15-27

3B 領土の縮小 28-36

本文

列王記第二 8 章を開いてください。エリシャの預言活動が、後半部分に入っています。この後半において、先駆者エリヤから受け継いだとても大切な働きをすることになります。それは、「アハブ家の滅び」です。エリヤがバアルの預言者と対決して、彼らを殺すことができたけれども、イゼベルはびくともせず、バアルの宗教もなくならなかったことを読みました。それでエリヤはがっかりしたのですが、主はすぐに彼に次に行くべき事を告げました。「主は彼に仰せられた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。また、ニムシの子エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。ハザエルの剣をのがれる者をエフーが殺し、エフーの剣をのがれる者をエリシャが殺す。しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかかめず、バアルに口づけしなかった者である。」(1列王記 19:15-18)」ここに書かれていることが実現します。エリシャがハザエルにアラムの王になることを告げます。イスラエルの将軍エフーに油を注ぎ、エフーがアハブ家の者たちをことごとく殺します。

1A 神の裁きの始まり 8

1B 残された者への恵み 1-6

8:1 エリシャは、かつて子どもを生き返らせてやったあの女に言った。「あなたは家族の者たちと旅に立ち、あなたがとどまっていた所に、しばらくとどまっていなさい。主がききを起こされたので、この国は七年間、ききんに見舞われるから。」8:2 そこで、この女は神の人のことばに従って出発し、家族の者を連れてペリシテ人の地に行き、七年間滞在した。

シュネムの女のことで、エリシャに、寝泊りすることのできる部屋を自分の家に設けた人です。男の子が死んでしまいましたが、エリシャや生き返らせました。

そして、その後に飢饉が起こりました。エリヤの時代から頻繁に飢饉が起こったことを思い出してください。アラム軍がサマリヤを包囲した時も、その包囲による食糧不足だけでなく、元々飢饉であったことが書かれています。そして、預言者のともがらが、飢饉のために野生のうりを摘みに取ったこともありました。これは、主がご自分に背くイスラエルに対する呪いとして定めておられることでした。「またあなたの頭の上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。主は、あなたの地の雨をほこりとされる。それで砂ほこりが天から降って来て、ついにはあなたは根絶やしにされる。(申命記 28:23-24)」しかし、その中で主がエリシャを通して、シュネムの女を守ってくださいました。

8:3 七年たって後、彼女はペリシテ人の地から戻って来て、自分の家と畑を得ようと王に訴え出た。8:4 そのころ、王は神の人に仕える若い者ゲハジに、「エリシャが行なったすばらしいことを、残らず私に聞かしてくれ。」と言って、話していた。8:5 彼が王に、死人を生き返らせたあのことを話していると、ちょうどそこに、子どもを生き返らせてもらった女が、自分の家と畑のことについて王に訴えに来た。そこで、ゲハジは言った。「王さま。これがその女です。これが、エリシャが生き返らせたその子どもです。」8:6 王が彼女に尋ねると、彼女は王にそのことを話した。そこで、王は彼女のためにひとりの宦官に命じて言った。「彼女の物は全部返してやりなさい。それに、彼女がこの地を離れた日から、きょうまでの畑の収穫もみな、返してやりなさい。」

何というタイミングでしょうか！奇蹟と言え、パンを増やす、水を清めるなど超自然的な現象を考えますが、実はタイミングも、主の与えられた奇蹟です。そしてこれが、エリシャが行なった顕著な奇蹟の最後になります。

ペリシテの地に言っている間に、その地が誰かのものになっていました。昔はこのような形で、虐げられている者が王に直訴して、救い出されるようにする社会体制になっていました。けれども、たまたまそこでゲハジが王に、エリシャの行った奇蹟について話しています。ゲハジはナアマンの件でらい病に冒されたはずですが、二つの解釈があります。一つは、時系列的にナアマンのことはこの出来事の後に起こった、というもの。もう一つは、ゲハジが悔い改めて神が癒されたというものです。

そして王が、宦官に土地の返却を命じただけでなく、その間の土地の大きさに対する収穫額も計算して返済することを命じています。なんという恵みでしょうか。このような神の裁きの徴の中でも、エリシャの神を信じたシュネムの女は大きく守られていました。エリシャの神を信じるというのは、命と恵みの神を信じるということです。私たちにとっては、「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。(ヨハネ 1:17)」とあるように、私たちもどん

な苦難や困難にあっても、イエス・キリストにあって恵みとまことが実現していく証しを持つことができます。

2B ハザエルの台頭 7-15

8:7 エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダデは病気であったが、彼に「神の人がここまで来ました。」という知らせがあった。8:8 王はハザエルに言った。「贈り物を持って行って、神の人を迎え、私のこの病気が直るかどうか、あの人を通して主のみこころを求めてくれ。」

エリシャの証しというのは実に力強いと思います。彼は敵国にいても、その王から大きな敬意を払われています。一度、サマリヤを包囲した彼の軍隊を目くらましにしたという打撃を加えたにも関わらず、このように好意を持たれているのです。ダニエルとその友人のことを思い出します。彼らは、王の命令に対して、神の命令を守るために全く動ぜず背いたのですが、それがかえって王の好意を勝ち取ることができました。そして普段は、王に忠実に仕えていた僕でありました。たとえ煙たがれても、神が生きておられることを周りが知り、神を恐れざるを得なかった証しであります。

8:9 そこで、ハザエルはダマスコのあらゆる良い物をらくだ四十頭に載せ、贈り物として携えて、彼を迎えに行った。彼は神の人の前に行って立ち、そして言った。「あなたの子、アラムの王ベン・ハダデが、『この病気は直るであろうか。』と言ってあなたのところへ私をよこしました。」

かつてナアマンが自分のらい病を治してもらうためにも多額の贈り物を用意しましたが、公的な儀礼の一部になっていました。

8:10 エリシャは彼に言った。「行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」8:11 神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、8:12 ハザエルは尋ねた。「あなたさまは、なぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」8:13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなだいそれたことができましょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。」

午前礼拝で学びました。ハザエルは、自分自身さえも気づいていなかった罪の深淵を、エリシャが見通したのです。

8:14 彼はエリシャのもとを去り、自分の主君のところに戻った。王が彼に、「エリシャはあなたに何と言ったか。」と尋ねると、彼は、「あなたは必ず直る、と彼は言いました。」と答えた。8:15 しかし、翌日、ハザエルは毛布を取って、それを水に浸し、王の顔にかぶせたので、王は死んだ。こう

して、ハザエルは彼に代わって王となった。

私たちが信仰生活において、どれだけ救いの喜びを持つことができるかどうか、また御霊によって力ある働きをすることができるかどうかは、自分の根源的な罪を認めているかどうかにかかっています。これは、自分の性格の弱さや人間的な弱さの話をしているのではありません。神の前に、自分がこのハザエルのような罪人であり、流血を引き起こす者であり、殺人者である。ゆえにこの自分はキリストと共に十字架につけられ、よみがえられたキリストを信じる信仰によってのみ存在しているのだ、という意識が強く持っているかどうか、信仰生活の豊かさが決まってきます。パウロがあればだけ大きな働きをできたのは、彼が告白した、「私はその罪人のかしらです。(1テモテ 1:15)」に言葉に拠っていました。

そして、神がこのハザエルを、ベン・ハダデの次にアラムの王として立てられたのは、彼を通してイスラエルに裁きを下されるからです。10章の最後のところで読みますが、彼はイスラエルのヨルダン川東岸地域を攻め、そこを取っていくようになります。領土を削り取るという裁きを神がハザエルを通して行なわれるからです。

3B アハブ家の浸透 16-29

8:16 イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に、ヨシャパテがユダの王であったが、ユダの王ヨシャパテの子ヨラムが王となった。8:17 彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。

ここで北と南の二国の王に「ヨラム」という人物が同じ時期に出てくるので、どちらのヨラムなのかを気をつけて読んでいかねばなりません。覚えていますが、アハブがラテモ・ギルアデをアラムから奪還しようと話しかけた相手は、アサの子ヨシャパテでした。そのヨシャパテの子がヨラムです。アハブの子にアハズヤがいました。けれども彼は欄干から落ちて病気になる、そのまま死にました。アハズヤには男の子がいなかったため、同じアハブの子にヨラムがいて、ヨラムが統治していたのです。

8:18 彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であったからである。彼は主の目の前に悪を行なったが、8:19 主は、そのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった。主はダビデとその子孫にいつまでもとしびを与えようと、彼に約束されたからである。

今は、ユダの王ヨラムの話をしています。しかし、何と彼はアハブの家の者たちがしたように、北イスラエルの王たちの道を歩きました。あの忌まわしいバアル信仰がなんと、南ユダまで浸透したのです。理由は、婚姻関係です。アハブの娘、アタルヤと言いますが、彼女を自分の妻として迎えたために親戚関係になったからです。

これがヨシャパテの行なったことへの対価です。ヨシャパテは、非常に靈的な人でした。けれども、イスラエルとユダの統一を願って、イスラエルとの協調を第一として動いていきました。そのためにアハブの悪に関わらざるを得なかったのです。神の憐れみによって彼は、九死に一生を得ましたが、その過ちは自分の子に及んだのです。協調するために、イスラエルの王の娘を自分の息子の妻とすることをよしとしました。自分自身は神に従ったのかもしれませんが、息子はバアルを敬い始めたのです。私たちは、自分自身が主に従っているだけが責務ではなく、自分の息子や娘、そして自分の回りにいる人々に信仰を継承していくことは大きな責務なのだ、ということです。

とは言いつつも、主はユダに対しては恵みを与えておられました。ダビデのゆえに、ユダを滅ぼすことを控えておられました。主はダビデの子、キリストにあつて私たちにも永遠の救いという保障を与えてくださっています。

8:20 ヨラムの時代に、エドムがそむいて、ユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。
8:21 ヨラムは、すべての戦車を率いてツァイルへ渡って行き、夜襲を試み、彼を包囲していたエドムと戦車隊長たちを打ったので、その民は自分の天幕に逃げ帰った。8:22 しかしなお、エドムはそむいて、ユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナもまた、その時にそむこうとした。8:23 ヨラムのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているのではないか。8:24 ヨラムは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。彼の子アハズヤが代わって王となった。

主の裁きは、少しずつ始まっています。ダビデの時代に周辺の国々はイスラエルに従属するようになりましたが、この前の学びではモアブがイスラエルに反発しました。そしてここではエドムがユダに反発しています。王を置いて独立する動きを見せています。かろうじて表向きはユダに従属していましたが、実質はすでにその支配から脱するようになりました。リブナというのは、ペリシテ人地方に近い所にある町ですが、そこも背こうとしたとのことです。

8:25 イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年に、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となった。
8:26 アハズヤは二十二歳で王となり、エルサレムで一年間、王であった。彼の母の名はアタルヤといい、イスラエルの王オムリの孫娘であった。8:27 彼はアハブの家の道に歩み、アハブの家にならって主の目の前に悪を行なった。彼自身アハブ家の婿になっていたからである。

ヨラムの子アハズヤの時には、ますますバアル信仰をユダに受け入れるようになりました。イスラエルの王オムリを思い出せるでしょうか、彼の息子がアハブでした。そしてアハブの妻が、シドンの王の娘イゼベルでした。その二人から生まれたのがアタルヤです。

8:28 彼はアハブの子ヨラムとともに、アラムの王ハザエルと戦うため、ラモテ・ギルアデに行ったが、アラム人はヨラムに傷を負わせた。8:29 ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマ

でアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来た。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが病気であったので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。

かつてアハブとヨシャパテが、ラモテ・ギルアデを奪還するために戦いましたが、同じようにヨラムとアハズヤが戦っています。そしてアラムの王は、かつてはベン・ハダデでしたが、今はハザエルになっています。いよいよ、神が動かれます。ユダにまで侵入していったバアル信仰を一掃せしめるため、神は歴代の北イスラエルの国では行なわれなかった、ご自身の油注ぎを一人の男エフーにせしめます。

2A 油注がれたイスラエル王 9

1B 即位の危急性 1-13

9:1 預言者エリシャは預言者のともがらのひとりを呼んで言った。「腰に帯を引き締め、手にこの油のつぼを持って、ラモテ・ギルアデに行きなさい。9:2 そこに行ったら、ニムシの子ヨシャパテの子エフーを見つけ、家には行って、その同僚たちの中から彼を立たせ、奥の間に連れて行き、9:3 油のつぼを取って、彼の頭の上に油をそそいで言いなさい。『主はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする。』それから、戸をあけて、ぐずぐずしていないで逃げなさい。」

エリシャは、エフーに油注ぎをするという重要な働きを預言者のともがらに任せます。主にある働きをこのようにして、引き継いでいます。イエス様が弟子たちに、最後の過越の食事をするとき、細かな指示を与えられたのと同じように、エリシャは、すでに主に与えられている知識に基づいてしなければいけない具体的な指示を与えました。

その中で、「戸をあけて、ぐずぐずしないで逃げなさい」というのは滑稽ですね。エリシャは、事の緊急性を知っていました。たった今、アハズヤが傷を受けてイズレエルに療養しています。かつユダの王ヨラムが共にいます。この時を見逃してはいけないという、かなり急ぎの用なのです。そしてエフーや家来が行動に移したら、あまりにもすばやい動きになるので、預言者の若者が巻き込まれないように逃げなさい、と言っています。このように主の働きには、忍耐して待たなければいけない時もある一方で、行なわなければいけないことを敏捷に行なわなければいけない時もあります。

9:4 そこで、その若い者、預言者に仕える若い者は、ラモテ・ギルアデに行った。9:5 彼が来てみると、ちょうど、将校たちが会議中であつた。彼は言った。「隊長。あなたに申し上げることがあります。」エフーは言った。「このわれわれのうちのだれにか。」若い者は、「隊長。あなたにです。」と答えた。9:6 エフーは立って、家にはいった。そこで若い者は油をエフーの頭にそそいで言った。「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。『わたしはあなたに油をそそいで、主の民イスラエルの王とする。9:7 あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたし

のしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流された主のすべてのしもべたちの血の復讐をする。9:8 それでアハブの家はことごとく滅びうせる。わたしは、アハブに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまでを、イスラエルで断ち滅ぼし、9:9 アハブの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャの家のようにする。9:10 犬がイスラエルの地所でイゼベルを食らい、だれも彼女を葬る者がいない。』こう言って彼は戸をあけて逃げた。

エフーは、油注ぎを受けました。北イスラエルにおいては、油注ぎを受ける人は唯一の王ではないかと思えます。それは、神の特別な御心を行なうために、その使命を帯びて動き出すことになるからです。主は、エリヤを通して語られたことを、エフーを通して実行するという強い意志を持っておられるからです。ナボテを殺して、彼の畑を奪い取ったアハブに対してエリヤが言った言葉を思い出してください(1列王記 21:20-24)。ここで若者が言っている言葉と同じことを話しました。そして北イスラエルは、ヤロブアム家がバシャによって滅び、バシャ家がジムリによって滅びましたが、同じことをオムリの子アハブの家に対しても行なわれます。

若者はエフーに油を注ぐ時に、私的な空間で行ないました。イスラエルの初代の王サウルが、同じようにたった二人のところで油注ぎを行ないました。大勢の人々の前で認められるための儀式ではなく、神がその個人に働きかけられる私的なものであることがわかります。イエス様も、人々は見ていましたが、水のバプテスマをヨハネから受けられた時、御霊が鳩のように下られて、父なる神に用いられる方となりました。とても個人的な出来事でありました。これが、御霊によって満たされることの意味です。油注がれることは、人に認められる前に神がその人を任命されるのです。そして神の任命された者が、人々の前で認められるのです。

9:11 エフーが彼の主君の家来たちのところに出て来ると、ひとりが彼に尋ねた。「何事もなかったのですか。あの気遣いは何のために来たのですか。」すると、エフーは彼らに答えた。「あなたがたは、あの男も、あの男の言ったことも知っているはずだ。」9:12 彼らは言った。「あなたは偽っている。われわれに教えてくれ。」そこで、彼は答えた。「あの男は私にこんなことを言った。『主はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする。』と。」9:13 すると、彼らは大急ぎで、みな自分の上着を脱ぎ、入口の階段の彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、「エフーは王である。」と言った。

エフーも、家来たちも、この預言者のことは前に会っていたようです。「あの気遣い」と言っていますね。エフーは、この知識を利用して、「お前たちは、あの男がいつも何を言っているか知っているだろう。」と話を逸らそうとしました。けれども、いつもの主君の反応がいつもと違うのを感じ、家来たちは、「あなたは偽っている。われわれに教えてくれ。」と問い詰めているのです。

聞いてみたら、なんと彼をイスラエルの王として油注いだということではありませんか。彼らはすぐに、彼を王として迎える儀式を行いました。彼が王ということは、これからすぐにクーデターを起

こすことに他ならないことを知っていたので、時機を逸してはいけないと思ったので、すばやく行動に移したのでしょう。

推測できることは、イスラエルの中になかり、アハブ家の王に対する根強い反感があったということです。これから読むと、エフーの謀反に、ほとんどの者たちが加担に回っているからです。時が熟したと言ってよいでしょう。そこで私はエリヤのことを思い出します。彼がバアルの預言者と対決した時は、状況はほとんど変わりませんでした。それで彼は落胆しましたが、今、後継者であるエリシャの長年の働きによって、霊的空氣が少しずつ変わっていったのです。ですから、神が時を知っておられます。そして神は真実な方で必ずご自分の御心を行なわれます。

2B 悪の交わりの滅び 14-28

9:14 こうして、ニムシの子ヨシャパテの子エフーは、ヨラムに対して謀反を起こした。ヨラムは全イスラエルを率いて、ラモテ・ギルアデでアラムの王ハザエルを防いだが、9:15 ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来ていた。エフーは言った。「もし、これがあなたがたの本心であれば、だれもこの町からのがれ出て、イズレエルに知らせに行ってはならない。」

これから大規模なクーデター、政権転覆を行ないます。彼は、ヨラムが自分が到着するまで逃げないため、直前まで分からないように行動するよう注意深く動きます。家来たちには他言するなと強く戒めました。

9:16 それから、エフーは車に乗って、イズレエルへ行った。ヨラムがそこで床についており、ユダの王アハズヤもヨラムを見舞いに下っていたからである。9:17 イズレエルのやぐらの上に、ひとりの見張りが立っていたが、エフーの軍勢がやって来るのを見て、「軍勢が見える。」と言った。ヨラムは、「騎兵ひとりを選んで彼らを迎えにやり、お元気ですかと、尋ねさせなさい。」と言った。9:18 そこで、騎兵は彼を迎えに行き言った。「王が、お元気ですかと尋ねておられます。」エフーは言った。「元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。」一方、見張りは報告して言った。「使者は彼らのところに着きましたが、帰って来ません。」9:19 そこでヨラムは、もうひとりの騎兵を送った。彼は彼らのところに行き言った。「王が、お元気ですかと尋ねておられます。」すると、エフーは言った。「元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。」

エフーは、「お元気ですか」という挨拶さえ返さない恐ろしい姿勢を見せていますが、彼のその動きに挨拶に来たその騎兵さえもが反逆へと回らせる、強い空氣が流れていたのでしょう。アハブ家をことごとく滅ぼす主の熱心が、人々の心にも伝わっています。

9:20 見張りはまた、報告して言った。「あれは彼らのところに着きましたが、帰って来ません。しか

し、車の御し方は、ニムシの子エフーの御し方に似ています。気が狂ったように御しています。」
9:21 ヨラムは、「馬をつけよ。」と命じた。馬を戦車につけると、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは、おのおの自分の戦車に乗って出て行き、エフーを迎えに出て行った。彼らはイズレエル人ナボテの所有地で彼に出会った。

先にエフーの家来たちが、預言者の若者のことを「あの気違い」と言っていました。今はエフー自身が「気が狂ったように」と形容されています。神の激しい怒りが、この猪突猛進に表れています。そして、はからずも、エフーとヨラムが会ったところは、かつてアハブが奪い取ったナボテの所有地でありました。

9:22 ヨラムはエフーを見ると、「エフー。元気か。」と尋ねた。エフーは答えた。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行なわれているかぎり。」

エフーは挨拶さえしています。これが悪に対峙する、神に油注がれた者に姿でした。ヨハネの第二の手紙には、キリストの教えのうちに留まらない者、異端の教えを持ちこむ者たちに対する対処についてこう話しています。「あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。そういう人にあいさつすれば、その悪い行ないをともにすることになります。(10-11 節)」

9:23 それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに、「アハズヤ。悪巧みだ。」と叫んだ。9:24 エフーは弓を力いっぱい引き絞り、ヨラムの両肩の間を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は車の中にくずおれた。9:25 エフーは侍従のビデカルに命じた。「これを運んで行き、イズレエル人ナボテの所有地であった畑に投げ捨てよ。私とあなたが馬に乗って彼の父アハブのあとに並んで従って行ったとき、主が彼にこの宣告を下されたことを思い出すがよい。9:26 『わたしは、きのう、ナボテの血とその子らの血とを確かに見届けた。…主の御告げだ…わたしは、この地所であなたに報復する。…主の御告げだ…』それで今、彼を運んで行って、主のことばのとおり、あの地所に彼を投げ捨てよ。」

これで、エリヤの預言の言葉が一つ実現しました。まさにナボテを殺したその流血を、同じ場所でも報いを受けることになりました。ここを読むと、イゼベルはナボテ自身に留まらず、ナボテの子らもすべて殺していたことが分かります。

9:27 ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハガンの道へ逃げた。エフーはそのあとを追いかけて、「あいつも打ち取れ。」と叫んだので、彼らはイブレアムのそばのグルの坂道で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。9:28 彼の家来たちは彼を車に載せて、エルサレムに運び、ダビデの町の彼の墓に先祖たちといっしょに葬った。

アハズヤはユダの王であるのも関わらず、イスラエルの地メギドで死にました。それは、自分がアハブの家との交わりをしていたからです。「交わり」というのは、その悪を共有することです。ユダに対してはダビデへの約束のゆえ滅びませんが、彼自身は滅びました。キリスト者であると言いながら悪との交わりをしているならば、やはり滅ぼされてしまうのです。「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。(1コリント 5:9-10)」

3B 背教の女の滅び 29-37

そしてついに、イゼベル本人への容赦ない裁きを遂行します。

9:29 アハズヤはアハブの子ヨラムの第十一年に、ユダの王となっていた。9:30 エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結び直し、窓から見おろしていた。9:31 エフーが門にはいって来たので、彼女は、「元気かね。主君殺しのジムリ。」と言った。

イゼベルは、かつてエリヤを脅したその同じ言葉をもって脅しています。「ジムリ」は主人バシヤを殺しましたが、七日間の命でした。将軍オムリがジムリに戦い殺したのです。そしてオムリ王朝が始まり、イゼベルはオムリの息子アハブと結婚したのです。お前も同じ運命を辿るのだ、と脅しています。けれども、目の縁を塗り、髪を結び直していたので、自分はこれで最期になると感じとっていたかもしれません。

9:32 彼は窓を見上げて、「だれか私にくみする者はいないか。だれかいらないか。」と言った。二、三人の宦官が彼を見おろしていたので、9:33 彼が、「その女を突き落とせ。」と言うと、彼らは彼女を突き落とした。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた。

エフーは、いとも簡単にイゼベルを殺すことができました。王アハズヤに仕える宦官が、いとも簡単に翻り彼女を窓から突き落としたのです。そしてエフーが彼女を踏みつけたのは、当時は足で踏みつけることが、征服した、屈服させたことの象徴になるからです。

9:34 彼は内にはいって飲み食いし、それから言った。「あののろわれた女を見に行つて、彼女を葬つてやれ。あれは王の娘だから。」9:35 彼らが彼女を葬りに行つてみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていなかったので、9:36 帰つて来て、エフーにこのことを知らせた。すると、エフーは言った。「これは、主がそのしもベティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、9:37 イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」

エフーは、イゼベルに対する神の裁きを敢行したと思つていましたが、これが全てではないことを

思い出しました。彼女は王の娘として葬られるのではなく、その遺体も最も凄惨な形で散らばることをエリヤが預言していたことを思い出しました。当時は、どのように葬られるかが、その人の尊厳を決める大きな尺度になっていたので、この死に様はイゼベルに対する神のとてつもない怒りと憤りをしっかりと表しています。

3A 不完全な改革 10

エフーはこれだけで終わりません。エリヤの預言に従えば、主は、「アハブの家はことごとく滅びうせる。わたしは、アハブに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまでを、イスラエルで断ち滅ぼ(2列王 9:8)」される、と言われました。残った者たちを徹底的に惨殺します。

1B アハブ家の惨殺 1-14

10:1 アハブにはサマリヤに七十人の子どもがあった。エフーは手紙を書いてサマリヤに送り、サマリヤのつかさたちや長老たち、および、アハブの子の養育係たちにこう伝えた。10:2 「この手紙が届いたら、あなたがたのところに、あなたがたの主君の子どもたちがおり、戦車も馬も城壁のある町も武器もあなたがたのところにあるのだから、すぐ、10:3 あなたがたの主君の子どもの中から最もすぐれた正しい人物を選んで、その父の王座に着かせ、あなたがたの主君の家のために戦え。」

エフーは、サマリヤの長老たちやアハブの子らの養育係に挑戦状を突きつけました。

10:4 彼らは非常に恐れて言った。「ふたりの王たちでさえ、彼に当たることができなかつたのに、どうしてこのわれわれが当たることができよう。」10:5 そこで、宮内庁官、町のつかさ、長老たち、および、養育係たちは、エフーに人を送って言った。「私どもはあなたのしもべです。あなたが私どもにお命じになることは何でもいたしますが、だれをも王に立てるつもりはありません。あなたのお気に召すようにしてください。」10:6 そこで、エフーは再び彼らに手紙を書いてこう言った。「もしあなたがたが私に味方し、私の命令に従うのなら、あなたがたの主君の子どもたちの首を取り、あすの今ごろ、イズレエルの私のもとに持って来い。」そのころ、王の子どもたち七十人は、彼らを養育していた町のおもだった人たちのもとにいた。10:7 その手紙が彼らに届くと、彼らは王の子どもたちを捕え、その七十人を切り殺し、その首を幾つかのかごに入れ、それをイズレエルのエフーのもとに送り届けた。

サマリヤのかしらたち、長老たちは、エフーに完全に屈服しました。

10:8 使者が来て、「彼らは王の子どもたちの首を持ってまいりました。」とエフーに報告した。すると、彼は、「それを二つに分けて積み重ね、朝まで門の入口に置いておけ。」と命じた。

これは今の私たちが読むと、あまりにも残虐な光景ですが、当時はこのような形で敵が完全に

屈服していることを目で見える形で見せました。

10:9 朝になると、エフーは出て行って立ち、すべての民に言った。「あなたがたには罪はない。聞け。私が主君に対して謀反を起こして、彼を殺したのだ。しかしこれらの者を皆殺しにしたのはだれか。10:10 だから知れ。主がアハブの家について告げられた主のことばは一つも地に落ちないことを。主は、そのしもべエリヤによってお告げになったことをなされたのだ。」

エフーは策略家です。彼は、イスラエルの民の信頼と人気を得る必要がありました。そのために、自分が主君に謀反を起こしたことによって、民の心が自分から離れることを防ぐ必要がありました。そこで、自分の命令を彼らに隠しました。「謀反については、私の責任だ。けれども、王の子らの惨殺は私が手を下したのではなく、その養育係なのだ。彼らのアハブ家に対する忠誠はこんなものだったのだ。」と言って、彼らの心を自分になびかせました。

10:11 そして、エフーは、アハブの家に属する者でイズレエルに残っていた者全部、身分の高い者、親しい者、その祭司たちを、みな打ち殺し、ひとりも生き残る者がいないまでにした。

サムリヤの七十人の息子たちを殺した後は、イズレエルにいたアハブ家の残りの者たちを虐殺しました。

10:12 それから、エフーは立ってサムリヤへ行った。彼は途中、羊飼いのベテ・エケデという所にいた。10:13 その間に、エフーはユダの王アハズヤの身内の者たちに出会った。彼が「あなたがたはだれか。」と聞くと、彼らは、「私たちはアハズヤの身内の者です。王の子どもたちと、王母の子どもたちの安否を気づかって下って来たのです。」と答えた。10:14 エフーは「彼らを生けどりにせよ。」と言った。それで人々は彼らを生けどりにした。そして、ベテ・エケデの水ためのところで、彼ら四十二人を殺し、ひとりも残さなかった。

エフーの過激な宗教改革があまりにも急速だったので、アハズヤの身内の者は子どもたちが殺されたことを知らされていませんでした。そしてエフーは彼らをも一人も残さず殺しました。しかし彼は肝心の者を殺していませんでした。アハズヤの母、オムリの孫娘アタルヤです。彼女が生きていたので、後にユダでダビデの王族の者たちをことごとく殺し、自分がユダの女王となりました(2列王 11 章)。

2B バアルの宮破壊 15-27

エフーの改革はこれに終わりません。バアル神を拝む者たち、その祭司たちも一掃します。

10:15 彼がそこを去って行くと、彼を迎えに来たレカブの子ヨナダブに出会った。エフーは彼にあいさつして言った。「私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか。」ヨナ

ダブは、「そうです。」と答えた。「それなら、こちらに手をよこしなさい。」ヨナダブが手を差し出すと、エフーは彼を戦車の上に引き上げて、10:16 「私といっしょに来て、私の主に対する熱心さを見なさい。」と言った。ふたりは、彼の戦車に乗って、10:17 サマリヤに行った。エフーはアハブに属する者で、サマリヤに残っていた者を皆殺しにし、その一族を根絶やしにした。主がエリヤにお告げになったことばのとおりであった。

興味深い人物が、エフーの前に現れました。レカブの子ヨナダブです。レカブはケニ人の子孫です(1歴代 2:55)。ケニ人は、モーセの義兄弟ホバブの子孫であり、舅であるミデヤン人イテロは異邦人でありながら、イスラエルの神ヤハウェを信じていました。イスラエル人を荒野の旅の道案内人となり、そしてヨシュアがヨルダン川を渡る時に共に渡り、そしてユダの地に住みついた人々です(士師 1:16)。彼らはイスラエル人ではないけれども、イスラエルの運命共同体の一部となりました。あのバラムも、ケニ人を見てこう預言しました。「あなたの住みかは堅固であり、あなたの巢は岩間の中に置かれている。(民数 24:21)」それゆえ、サウルがアマレク人と戦う時も、アマレク人から離れるようにケニ人に事前に通達しています(1サムエル 15:6)。この子孫のヨナダブが、エフーに働く主の御霊に触発されて、ともに主のための戦いを戦いました。

そしてさらに興味深いのは、このヨナダブの子孫がエレミヤの時代に、彼の言い伝えをきちんと守り行っている姿を見ることができることです。エレミヤ書 35 章 6 節以降で、ぶどう酒をすすめるエレミヤに対してこう答えています。すると彼らは言った。「私たちはぶどう酒を飲みません。それは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じて、『あなたがたも、あなたがたの子ども、永久にぶどう酒を飲んではならない。あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはならない。あなたがたが寄留している地の面に末長く生きるために、一生、天幕に住め。』と言ったからです。(6-7 節)」彼らは遊牧民であり、時間を超えてこのように先祖のしきたりをそのまま守っていた人々です。そして、イスラエルの地で、ユダの荒野を通るとベドウィンが今もいます。彼らは、ケニ人の子孫ではないかもとも言われています。

10:18 エフーは民全部を集めて、彼らに言った。「アハブは少ししかバアルに仕えなかったが、エフーは大いに仕えるつもりだ。10:19 だから今、バアルの預言者や、その信者、および、その祭司たちをみな、私のところに呼び寄せよ。ひとりでも欠けてはならない。私は大いなるいけにえをバアルにささげるつもりである。列席しない者は、だれでも生かしてはおかない。」これは、エフーがバアルの信者たちを滅ぼすために、悪巧みを計ったのである。

アハブは、サマリヤにバアルの宮と、その祭壇を築いていました(1列王 16:32)。これを、バアル信者と祭司とともに一気に滅びす計画です。

10:20 エフーが、「バアルのためにきよめの集会を催しなさい。」と命じると、彼らはこれを布告した。10:21 エフーが全イスラエルに人を遣わしたので、バアルの信者たちはみなやって来た。残っ

ていて、来なかった者はひとりもいなかった。彼らがバアルの宮にはいると、バアルの宮は端から端までいっぱいになった。10:22 エフーが衣装係に、「バアルの信者全部に祭服を出してやりなさい。」と命じたので、彼らのために祭服を取り出した。10:23 エフーとレカブの子ヨナダブは、バアルの宮にはいり、バアルの信者たちに言った。「よく捜して見て、ここに、あなたがたといっしょに、主のしもべたちがひとりもないようにし、ただ、バアルの信者たちだけがいるようにしなさい。」

バアルの信者だけを滅ぼすように祭服を着させ、さらに主のしもべたちがいないように見て回るようにさせました。神の裁きは必ず、このように正しい者と悪者を分けられます。黙示録 9 章で、悪霊による裁き、いなごのような軍隊と蛇の毒を持つ悪霊どもの裁きで、神に印を押された者たちはその害を受けることがないことが書かれています。アブラハムが、正しい者と悪者をどちらも滅ぼされるのですかと執り成した時に、主は正しい者たちは滅ぼさないと明言されました(創世 18)。

10:24 こうして、彼らはいけにえと、全焼のいけにえをささげる準備をした。エフーは八十人の者を宮の外に配置して言った。「私があなたがたの手に渡す者をひとりでものがす者があれば、そのいのちを、のがれた者のいのちに代える。」10:25 全焼のいけにえをささげ終わったとき、エフーは近衛兵と侍従たちに言った。「はいつて行って、彼らを打ち取れ。ひとりも外に出すな。」そこで、近衛兵と侍従たちは剣の刃で彼らを打ち、これを外に投げ捨て、バアルの宮の奥の間にまで踏み込んだ。10:26 そしてバアルの宮の石の柱を運び出して、これを焼き、10:27 バアルの石の柱をこわし、バアルの宮もこわし、これを公衆便所とした。それは今日まで残っている。

最後、この忌まわしいバアル信仰の場所を公衆便所にまでにしました。この徹底ぶりはすごいです。そこを汚し、痕跡なきものにしました。

3B 領土の縮小 28-36

ところが、次からが大事な点になります。

10:28 このようにして、エフーはバアルをイスラエルから根絶やしにした。10:29 ただし、エフーは、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪、すなわち、ベテルとダンにあった金の子牛に仕えることをやめようとはしなかった。10:30 主はエフーに仰せられた。「あなたはわたしの見る目になかったことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行なったので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に着こう。」10:31 しかし、エフーは、心を尽くしてイスラエルの神、主の律法に歩もうと心がけず、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪から離れなかった。

エフーは、アハブの罪については主からの言葉を全て受取り、ここまで熱心に守り行いました。ところがヤロブアムの罪については無頓着だったのです。主に与えられた命令に対して忠実であっても、それが主ご自身に自分自身をすべて明け渡しているとは限らないのです。主の働きに非

常に熱心な人が、実は、主に命じられている基本的なことさえできていない、ということはよくあります。そこでエフーは、主に祝福されましたが、代々の祝福ではなく四代目までという制限が付きました。もし彼がヤロブアムの罪を止めていたら、もっと長く続いていたことでしょう。

私が先々週、牧師会議に参加するために渡米した時、その到着した日も日曜日でしたが、ある兄弟が朝の礼拝で語られた御言葉を分かち合っていました。使徒の働き 2 章 42 節ですが、「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」とあります。聖霊が降ってから、弟子たちが行なっていたことが書かれています。そしてここから、「バランスを取る」ことの勧めを受けたとのこと。使徒たちの教えを堅く守ることには非常に熱心であっても、交わりをしていなければバランスに欠けます。交わりをしているけれども、使徒の教えを守っていなければバランスにかけます。祈りに時間を費やしていなければ、バランスに欠けます。教会というのは、使徒の教え、すなわちイエス様が命じられたあらゆることがらを教え、それを守るように聞くところでありますが、それに加えて、交わりをする、パンを裂く、祈りを捧げるという営みによって、初めて神の御心を達成することができるのです。

10:32 そのころ、主はイスラエルを少しずつ削り始めておられた。ハザエルがイスラエルの全領土を打ち破ったのである。10:33 すなわち、ヨルダン川の東側、ガド人、ルベン人、マナセ人のギルアデ全土、つまり、アルノン川のほとりにあるアロエルからギルアデ、バシヤンの地方を打ち破った。10:34 エフーのその他の業績、彼の行なったすべての事、および彼のすべての功績、それはイスラエルの王たちの年代記の書に記されているではないか。10:35 エフーは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をサマリヤに葬った。彼の子エホアハズが代わって王となった。10:36 エフーがサマリヤでイスラエルの王であった期間は二十八年であった。

主は、ついに領土を削り始められました。エフーがヤロブアムの罪から離れなかったため、ついに長いこと忍耐されていた主ですが、ご自分の最終的な裁きを徐々に行なわれます。最終的な裁きとは、約束した土地から彼らを引き抜くことです。これは紀元前 722 年のアッシリヤ捕囚、紀元前 586 年のバビロン捕囚によって実現します。

削り取られているところは、ヨルダン川の東岸地域です。ルベン、ガド、マナセ半部族の割り当て地であったところ。思い出せますか、モーセがヨルダン川のところまでイスラエルを導いたのに、彼らがヨルダン川のこちら側で住みたいと言い張りました。そして彼らはここに住んだのですが、彼らが最も早く、外国人によって踏み荒らされたのです。神の理想から離れたところにいると、神はその主張を許されることがあります。けれども、このように神の初めの御心に留まっていれば、神は私たちのために最善を考えておられるのですから、最善以下のものしか受け取れなくなるのです。